

# たより

## 『美紗の会』 ニユース

第37号

平成十三年八月二十八日

発行者 「美紗の会」  
03-3441-2726  
編集責任者 大久保 朋子

### 月日は百代の過客にて

西松布 咏

行きこう春の旅は隠岐の島から始まった。

昨年平安時代後期の出雲大社本殿の御柱が発見され古の名歌を新しい世紀に再現するイベントが四月十四日に隠岐神社で行なわれた。

私は、御鳥羽上皇の御歌を唄うことになった。

今は米子まで飛行機。境港からフェリーで隠岐の島へと数時間で行ける近さであるが、承久の乱で流された七百八十年前は……と想像を絶するどこまでもく広い海を島へと渡った。前日遅くまで境内の前に大きな舞台を設置するための多くの方々の苦勞を打ち消すかの様に当日は、朝から雨や風が吹き荒れ、波がうねり、まるで上皇が悲しみ怒っているかのような神話の再現となった。

昼から神社でのごそかな儀式が延々と続くなか、時折の一筋の陽光が、奇跡を感じさせ夕闇が降りる頃には、あたりが静寂を包みびたりと嵐は止み、予兆のオーブニング音楽が流れる頃には、夜空に

星が輝いていた。

音楽に照明がともり踊りへと平安の雅が導かれる頃「我こそは新島守よ隠岐の海の荒き波風心して吹け」の御歌を、夜空を見上げ熱唱した。上皇の悲しみが、いつしか私の心となって「唄は心の旅」をまさに体感したひとときだった。

唄の旅は、それから二ヵ月後ジャパンソサエティの「日本文化と性」シリーズ公演の「ニューヨークへ」と。平安短歌から江戸の春画、現代アートにおけるエロティシズムの役割と表現方法をさぐる講演会の最終日に参加した。ジョンソルト氏の進行で、インディアナ大学のスミエジョーンズ教授が、平安時代短歌の恋愛表現から与謝野晶子や寺山修司にいたる変遷を紹介。詩人の伊藤比呂美氏は朗読と性体験や出産の詩作への影響を。そしてエロティックでありながら、静かに深い現代の哀しい性表現の林あまり氏の朗唱。私は江戸の遊女の恋のゆくえと芸者の愛の歎びを率直に表現したケネスレクスロ

スの「摩利支子」の詩を三味線にのせて唄った。性表現は、普遍的な問題でありながら社会や時代の変遷と共に唄の中にも変化していったことを聴衆は、感じてくれたよう。後日、唄と三味線の織りなすゆつたりとした流れの中に、揺れるリズム。海の波のように、吹きおろす風のように吐露する人の感情のように、ひとつとして同じではない不規則なリズムに自分の呼吸を合わせてゆく楽しさを味わいました。とメールを下された。

音楽は、いつの時代にもどの世界でも心に響くものと旅の中でこそ強く感じるが、ニューヨークから足を伸ばし湖畔に住むハワードヒベットの宅を訪れた時忘れられない体験をした。ヒベット先生は、現在ハーバード大学に在籍なさっており、屈指の日本文学研究者で、二十代に来日され三島由紀夫、川端康成、谷崎潤一郎等との親交があり、代表的な日本文学の多くを翻訳なさったり、日本のユーモアについての著書がある偉大な学者であられる。

その風貌は、いつも静かな笑みをたたえ、見上げる程長身で湖畔に佇む四角堂で、三味線を弾きたいと言いつつ旅をしてゆきたい。

### 星降る夜によせて

山辺知行

(九十四才東京国立博物館名誉会員)

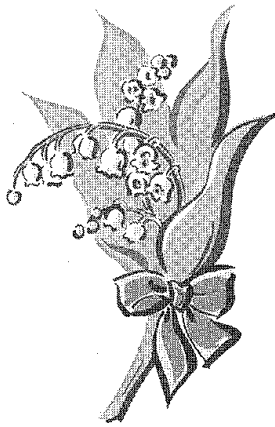
昨夜の三味線と唄の会は、大面白く一番前に坐つて堪能しました。今迄三味線と唄と言うと芸者のお座敷芸や、たかだか寄席芸ぐらいしか聴くチャンスがありませんでしたが、西松さんの三味線唄は、立派な会場芸術で、芸を芸術にまで引き上げられたのは、私の願ひに、うなずかれ「それでは、床を清めましょう」と箆を持たれた姿は、まるで「松の翁」のようだった。

立派なものと思ひます。色々な唄を自由にこなして一派を立てているお師匠さんなのでしようか。(お弟子らしい若い方が何人か見えました)

日本の芸能―お花やお茶でもそうですが、家元などがあつて何と無理屈をつけては他と違った処を作つて保身に努める処があつて、小さく固まつて型を守ることで進歩も鈍くなつていくようですが、そんなことに構わずに良い所を採つて自由に品位を保つて延びて行くのは大事なことと思ひます。但し芸人の三味線にも捨てられぬ味のものがあります。(私の貧しい経験でも)若い頃といつて私の二十代の頃、昔遊び人だった爺さんと二人で深川あたりの小さな料亭で飲んだ時、その爺さんが昔蟲屋にしていた妹分の芸者あがりの年増を二人呼んだことがあります。「今晚は若い人と一緒だ。婆さんは目障りだから隣の部屋で勝手

かくして私の旅は、隠岐の島。ニューヨーク。ボストン。そして四年前にソロコンサートをしたウエスリン大学の街ミドルタウンへと続いていったのだった。

「月日は百代の過客にて行きこう年も又旅人なり」の芭蕉の句のように、又こうした旅をしてゆきたい。



にやつてくれ」と言つて二人分の酒と肴を預けて隣の部屋で唐紙を少し開けて色々弾いたり唄つたりさせた挙句、最後に「じゃあ何時ものあれを。」と言つて二人で掛け合ひで新内の爪掻きをやつたのですが、初めは唄も三味線も聞こえるか聞こえない位細く小さな音でそれが段々大きくなって色街の寒い夜の風に乘つて聞こえる様になり、やがて二階の下で佇んで唄つてゐる様な大きな声になつて「今晚は」と声がすると爺さんは心得て紙に包んだお花を「ご苦労」と言つて二人に襖を少し開けて投げてやる。二人は「毎度アライ」とか何とか言つて又段々音を小さくして廊下の方へ消えて行つて入口の襖を開けて「お休みなさん」とか何とか言つて帰つてしまいました。

見事な演出だったと記憶に残つています。日本の唄は歌詞に乗るのでこうした演出は、少ないのですが何とか工夫すれば舞台唄としての色々な演出も出来そうです。色々考えさせられて大変愉快でした。

# 「七夕コンサート」 夢想

高野 純子

西武新宿線の沼袋駅を下り、商店街を数分歩き、ふと横道にそれるとこんなもりとした緑に包まれて紅い鳥居が現れた。近くには、百観音のお寺があるという。梅雨の季節であるのが、この付近だけは涼しい風が吹いている。その木立の一角にある呉服商のシルククラブで、西松布師匠の「七夕コンサート」がたち上がった。弟子の伝田京子さんが、こんな場所でも布師匠の唄を聴いてみたいと思ったのがきっかけとなって実現した。

お召の会の初日ということもあって、会場にはあふれるほどのお客様が集まってきた。さつぱりとした。伝田さんの「師匠うー！」という呼びかけに、応えて、「はあーい」と二階から階段を降りてきた師匠の今日の装いは、白い色がまぶしく映えなかに、紺色の竹が涼しげな江戸好みの綿縞の浴衣である。

師匠のはにかんだような笑顔と解説で、「緑かいな」から始まり、夏にちなんだ端唄・小唄が、まるで七夕の笹につるした色紙のように会場を彩っていく。

私は、暑さで少し頭がぼおっとなしながら、ふっと一年前に初めて布師匠の唄を聴いた四国の風景を思い出していた。高松は四国村の農村舞台。松岡正剛氏を語り部に、中世から明治にかけての語の歴史を布師匠が体現したものであった。それは、私にとってまったくの「異国」体験で、まるでカザルスのチェ

口の海原を漂うような、タプキの「インド夜想曲」を聴いているときのような、身体の内いちはん密やかな部分に触れる「かけがえのない瞬間」を生きたひとときだった。私は、完全に酔い酔いして連れ去られてしまった。

と、同時に、大好きだった祖母の姿が布師匠にびびりたりと重なってきた。五、六歳のころだったと思う。遊びにいくと、いつも三味線を弾き長唄を歌っている祖母の姿だ。あとになって考えてみただけで、祖母は若くして母を生んだので、私が小学生になる頃の祖母は、本当に布師匠のように若くて美しくかった。私の記憶のなかの祖母は、火鉢の前で煙管を吸いながら銀幕のスターの話をしてくれた。すでに白髪の色なのだが、三味線を弾いていた頃の祖母は、子供心になにやらちよつと、いつもとちがって(きつと)やバイを感じたのだ。私は、首に飛びつくこともせず、だまって部屋を隅にこまごま置くのじつと待っていたように思う。

あの四国の日以来、布師匠の唄と私は、私のなかの無数の細胞を蘇らせ続けている。記憶以前の、細胞に刷りこまれているナニカを目覚めさせ続けてくれている。それは、水のようにすくおうとして零れ落ちてしまうもの、超微粒子のように空気のなかに満ち溢らびがっていくもの、細胞と細胞の間を流れていってしまふもの、そんななんとも形容

去る四月三十日、国立劇場で開催された日本舞踊の人間国宝「花柳寿楽」師の主宰する錦会に招かれ家内と一緒に、「花柳千寿文」さんの踊りを観た。

## 素晴らしい 千寿文さんの踊り

本郷 公基

錦会の踊りを観るのにはこれで三回目かと思うが、家内も私も千寿文師の踊りは今回が一番良かったと思った。久しぶりの立ち役で清元の傀儡師の踊られたが国立大劇場の広い舞台に相応しい凛とした風格があり、しかも軽妙でユーモラスな踊りはすべて観客の目を釘付けにされた。私は前日まで孫のお守りや腰を痛めたりして相当くたび

れていたせいか第一部の何人かの踊りを観ているうちに不覚にもウトウト居眠ってしまったが、千寿文師の踊りは瞬きもせず見入ってしまった。あちこちで「千寿文!!」「チ・ツ・フ・ミ!!」と声援があがった。

観終わってロビーでお茶を飲んでいたら、見知らぬ三人連れのご婦人が傀儡師の踊りは素晴らしいと話を聞いてわが意を得たりの気分になった。

## 美紗の新人公演

今回は次の三人の方々です。一人目は青山正子さん。国立公立美術館に納入する美術品のプロデュース、展覧会の企画、建築物に納入される美術品のプロデュース、新人アーティストの為にショーの企画等々の中広いお仕事をされる会社の経営者だそうです。長い黒髪、スラリとした華奢な容姿からは想像出来ませんでした。プライベートでも混声合唱団を作り、コンサートを開いたり、最近ではボーカルを組んでコンサート計画も。パワフルですネ!

ヤマハで、マンドリンやエレキギターを教えたことのある私、けれども一日と私の存在を確かなものにしてくれるもの。

七夕の短冊に一句、  
驚草や 飛び立つ朝に  
絹の声

る教えてもらったりするうちに、だつたらと川辺さんの美紗の会へのおさそい。何か日本のな事をやってみようと思っていたので早速入門ということになりました。

二月に入門したのに三月におさらい会、まさかの出演で心の準備もなまま当日が来てしま、二つだけのレパトリで舞台上に上り着いたこと。とても落ち着いてはしてよく透るお声で、二月に入門されたばかりとは私にはとても思えませんでしたヨ。

一見、おっとり奥風、でもお話ししてみるとやはりお医者様、理路整然として、さつぱりとした口調。何かあったら相談に乗っていただきたくなる様な頼もしさです。他の趣味はゴルフとか。休診日にはゴルフバッグを車に積んで、お仲間がいなくても一人でさつさとゴルフ場へ。青山さんといふ稲生さんといふ、美紗の会の女性はつくづく皆パワフルです。

三人目は富田就將(とんだなるまさ)とお読みします)さん。美紗の会でも先輩方の多い商船三井にお勤めです。

## 今後の予定

●八月二十一日・九月二十四日 東京ステーションギャラリーで開催の「シユウルレアリスト山本博右一不可能の伝達者」にやせて

●九月九日(日)十四時、渋谷マークシティ(渋谷駅接続ビル)ウエスト十二階  
●九月二十一日(金)十九時より南青山M.A.N.D.A.L.A  
●九月十六日(日)十三時より秋葉原万世い会館  
●第三回ニユアンスの会  
一 伝統・ふりかえる未来  
九月二十一日(金)十九時より南青山M.A.N.D.A.L.A  
ゲスト 谷川俊太郎・渋谷毅  
浅葉克己・成瀬信彦

## 会議室

●千寿文会浴衣ざらい  
一 花柳千寿文主催  
九月十六日(日)十三時より  
●秋葉原万世い会館  
●第三回ニユアンスの会  
一 伝統・ふりかえる未来  
九月二十一日(金)十九時より南青山M.A.N.D.A.L.A  
ゲスト 谷川俊太郎・渋谷毅  
浅葉克己・成瀬信彦

お稽古をはじめのきつかけはある朝、突然、富田さん御結婚当時の上司である山本さん(美紗の会)から電話があり、小唄のおさらい会があるけど来ないかとおさそい。当日は行けなかつたけれど、そんなこんなで二回程の体験入門の後、四月から弟子入ということに。

これはかなり山本先輩の強制があったのではと私、思いましたが、若い頃は寄席の出唄が好きで寄席に通った事もあると伺って、やはり邦楽をお好きになる要素はお持ちだったのですネ。

クラシックがお好きでよく聞かれるのですが最近では出来るだけ邦楽も聞く様になっています。(見習わなくては!)邦楽の音程や間が難しく、なかなかうまく唄えないけれど、師匠の艶っぽい唄を聞くのが楽しくて来ています。とおっしゃっています。きちんと姿勢を正されての生真面目なお話振りの中で、息子さんのサツカリの試合の事を話された時のうれしそうなやさしい笑顔が印象的でした。